

第250回

「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」(令和8年2月)句会記録

令和8年2月9日(月)、2月は、自然界の気候上から言えば、まだまだ寒く冬の真只中にありますが、俳諧での2月の位置は、春しかも「初春」或いは「早春」と言うことになり、この時期の季語を句に入れて俳句は詠まれます。そして、その季語数の最も少ない月が、2月です(月ごとで言えば、2月の季語数65、3月177、4月は266ということです)。ただ、俳句を楽しんでいる者の感覚から言えば、2月はひたすら春を待っている「待春の季」であり、春を探して徘徊する「探春の季」と言えると思います。今月集まった句の中にもそうした句があるように思います。

今回の「道草」句会は、250回目です。私たちはこれまでに句会100回記念句集、150回記念句集、200回記念句集と3冊の記念句集を発刊してきました。250回目の記念句集の発刊も企画しています。3月には計画討議も本格的になると思われます。楽しみがひとつ増えました。

さて、本日の句会です。いつも奥田和感さんが準備して下さる新橋ばる一んに集合した方々は下述の通りです。

2月投句に参加された方(13名)

井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

句会に参加された方(8名)

和感さん、月草さん、荻女さん、柴楽さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、白然。(歌多音さんは選句に参加されました。)

本日の優秀句並びに獲得票数

令和8年2月の優秀句、並びにその中から天賞に推挙された句と、最多得票賞(☆印)の句は、下述の通りです。

◎『幼な児の春陽透けたる耳紅く』	栄女	天2☆5
◎『杖のおと春を探しにそぞろ行く』	栄女	天2☆5
◎『薄氷や突けば音なく泳ぎけり』	清助	天2㊦4
◎『こまやかに光る川瀬や猫柳』	荻女	天2㊦3
◎『イヤリングつけたくなる日草青む』	多佳	天1☆5
◎『早春の陽に縄跳びの弾みたる』	多佳	天1㊦3
◎『ショウウィンドウ「春よ、春よ」と招きをり』	和感	天1㊦2
◎『初恋の君逝きしみそらに春の星』	一光	天1㊦2
◎『外に洩るる香の店あり麗らけし』	白然	天1㊦2
◎『春寒や歯医者帰りの白き富士』	白然	天1㊦2

お世話を下さる傘吉さんが、「今回は栄女さんからの投句が一番に届いた。気合が入っていると思った」と、ニコニコ笑って仰っていました。上述の二句「幼な児の春陽透けたる耳紅く」と「杖のおと春を探しにそぞろ行く」が、それぞれ天賞二つと最多得票賞(☆印)を得票数5票で獲得しました。前者は天真爛漫な幼な児の耳が紅く透き通って見える清純な美しさを捉え、後者は杖をついても元気に歩く心身の強さを「探春」という角度から表現しました。見事でした。

次に清助さんの句「薄氷や突けば音なく泳ぎけり」が、天賞二つと得票数4票を獲得しました。川面に薄く張っている氷を突くと、スーッと動き始める。それを泳いでいると表現しました。共感した読者からの得票数が天賞二つと4票でした。新発見です。

次に荻女さんの句「こまやかに光る川瀬や猫柳」が、天賞二つと得票数3票を獲得しました。上五、中七の「川瀬でキラキラ踊るこまやかな光」、そして傍に立っている柔らかい猫柳。春の始まりですね。読者の琴線に触れたと思われます。

次に多佳さんの句「イヤリングつけたくなる日草青む」が、天賞一つと最得多票賞（☆印）を獲得しました。この句を読んだとき、印象強く心を揺らせたのは「イヤリングを付けたくなる日」でした。早春の快晴日、何か心躍らせるものがある「今日はイヤリングをつけて行こう」と……。まさに心弾む一瞬です。中七の「つけたくなる日」で句は切れ、下五の「草青む」という季語で、句全体を締めました。これで早春の嬉しくなるような陽気さ、楽しさを言い切りました。この句も見事でした。

今月のもう一度見直す優秀句（気にかかった句）

- ◎『朝ぼらけ樹の天辺の春の鳩』 蒼樹
- ◎『水仙の香に包まれて朝の福』 一光
- ◎『花ミモザひとりの家のひとりの餉』 荻女
- ◎『堅香子の花におほはれ遺跡山』 晶如
- ◎『凍反る朝の味噌汁香り立つ』 清助
- ◎『サスペンス読み耽る夜の余寒かな』 傘吉
- ◎『朧月何を思案の石地藏』 傘吉

（ご参考）

藤田湘子著『俳句作法入門』角川選書 14版発行 平成19年10月25日

16頁「リズムと季語」から抜粋

……俳句は言うまでもなく韻文である。韻には「ひびき」という意味がある。「ひびき」すなわちリズムと解していいだろう。それだからわずか十七音の俳句が韻文として立つためには、十七音のリズムによって十七音の意味だけでは伝え得ぬところを、表現することを考えなければならないのである。

ところが、大方の作者は、十七音の中でそこそこの意味がまとまると、もうそれで「わが事成れり」と思ってしまう。これは全く逆であって、私などは、一句が形を成した後の推敲では、まず自分の表現したい内容にふさわしいリズムかどうかを最初に考える。そして芭蕉の言った舌頭に千転することによってそれを検証するのである。したがって、意味をゴテゴテと抱え込んだ作は、たいていこの段階で大鈍を振るって意味を消すようにするか、若しくは捨ててしまう。

24頁「リズムと季語」から抜粋

……水原秋櫻子のことばに、「一つの題材を得て、ああもしてみたい、こうもしてみたいと、捏ね回しているのが一番わるい結果になるらしい。それよりも見た瞬間のつよい印象を、そのまま真直ぐに詠み上げるのが最良の手段なのである」というのがある。が、このあとに、条件がついていて、「一瞬の間にその印象を頭の中で整理し、核心のところだけをつよく描き出す力を持っていなければいけない」とある。

条件の部分は言ってみれば「しっかりした直感力、描写力を持つ」ということだと思う。しっかりとした直感力や描写力を身につけるには、長い修練の歳月が必要である。だから、ごく初心の作者に冒頭のことばがそのまま通用するとは限らぬが、少なくとも「捏ね回しているのが一番悪い結果になる」ことは、誰にも通用する。私なども、一つの素材でいくつかの句案が生じたときは、結局、形のすっきりした作を残すようにしている。

以上（白然記）